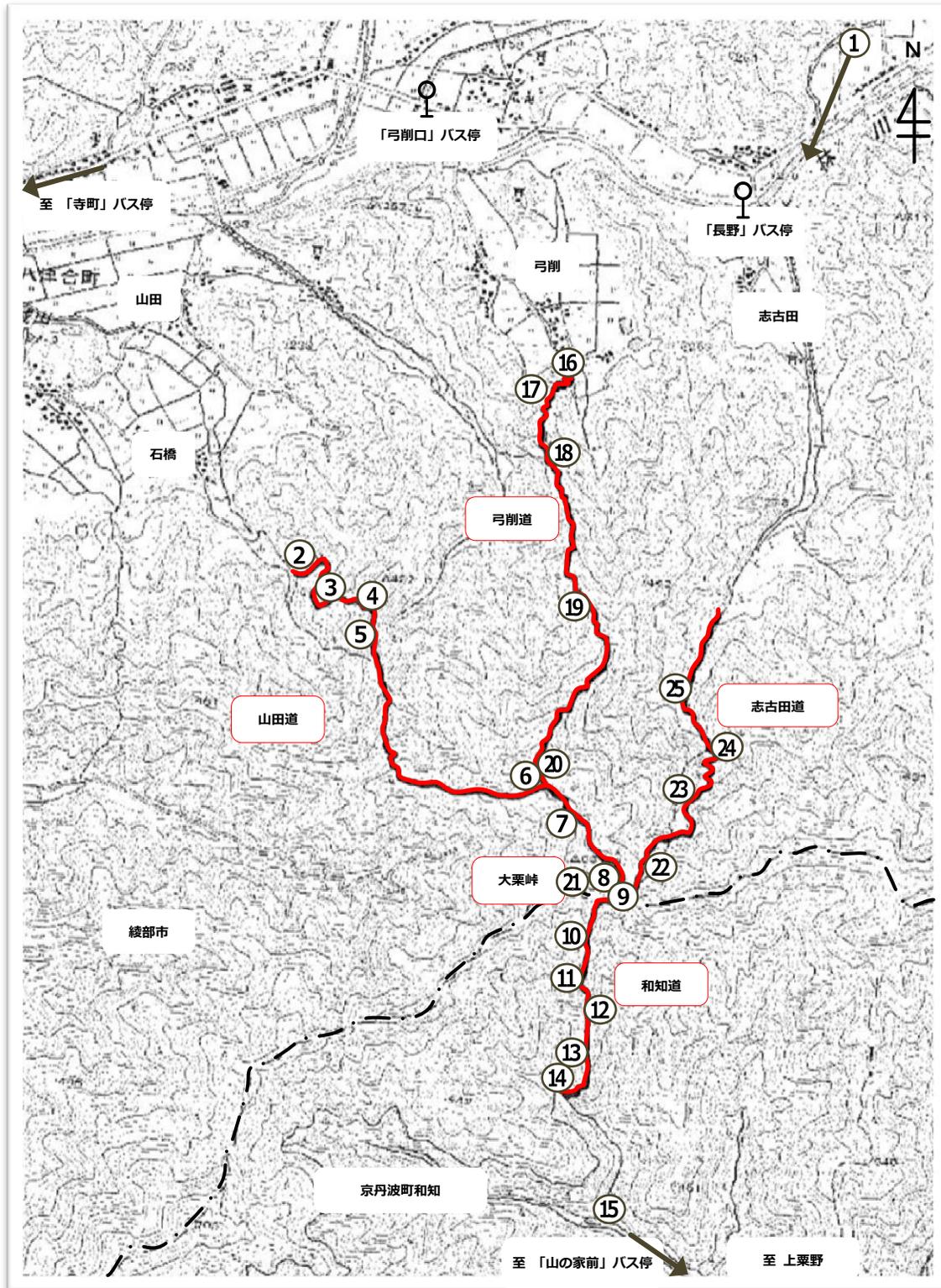


○大栗峠調査報告

1 位置図



＜交通アクセス＞

- ・綾部方面から
山田道は、あやバス「寺町」バス停から登山口まで 2.0km
弓削道は、あやバス「弓削口」バス停から登山口まで 1.4km
志古田道は、あやバス「長野」バス停から登山口（林道終点）まで 2.0km
- ・和知方面から
京丹波町営バス「山の家前」バス停から登山口まで林道を 2.7km

2 調査日

第1回調査 平成23年11月29日（山田道）

第2回調査 平成23年12月6日（弓削道・志古田道）

3 調査箇所

綾部市八津合町山田～大栗峠～京丹波町上栗野（約8km）

※大栗峠の綾部側に、山田道・弓削道・志古田道がある。

4 調査結果概要

（1）総論

綾部から和知まで部分的な課題はあるが通行可能であり、道標や石仏など文化資源も豊富で、交流エリアとして有望である。今回調査した山田道は登り口に道標があり、下部は間伐作業道造成のため古道がわかりにくくなっているが、上部は広い古道があり、弓削道との合流点に大きな石標もある。

（2）山田道～大栗峠～和知道

山田から峠まで約2時間で、峠には道標と石仏があり、志古田道が合流している。峠から和知に下りる道は綾部側より急傾斜であるが道の状態はおおむね良好であり、途中には石仏もある。尾根の末端、林道に降り立つ地点のみは古道が失われている。なお、尾根末端の古道は、急傾斜と崩土、林道工事などの影響で失われていたが、痕跡らしきものがあった。長い林道歩きを経て上栗野に達すれば和知山の家がある。道中、トイレなし。綾部側・和知側とも、林道から峠道への取りつき付近には駐車場なし。

（3）弓削道

弓削道は、丹後（舞鶴）と大栗峠を結ぶ最短経路である。弓削からの古道は太く深い道で、一部分の崩落や倒木をさければ迷わず歩くことができる。標高550～600m付近で、北方の上林川や畑口川流域の展望がある。山田道との合流点に石標がある。

（4）大栗峠～志古田道

峠から志古田におりる道は、峠の直下では、小さな尾根をくだる掘れた道であり、小さな谷々の合流点で谷を東にまたぐと、急斜面をくだる細い道となる。途中で部分的に北方の眺望がある。標高400～450mに崩落があり、古道が消失している。崩落のやや下から道は谷の左岸に移り、林道終点に至る。尾根道である弓削道に対して、志古田道は谷道であり、道は細く、崩落の影響もあって、通常の通行はやや困難と思われる。道中、トイレなし。峠道への取りつき付近には駐車場なし。

<参考> 郷土史家 川端二三三郎さんのお話し～大栗峠をめぐる史料と史実、及び古道と道標～

- ・上林と丹後田辺（舞鶴）や京都をつなぐ古道は、縄文時代から使われていたと考えられるが、文献として現れるのは室町時代からである。
- ・文献「連歌師里村紹巴（れんがし さとむらじょうは）の旅」では、1569年に舞鶴市安久の城から木住峠を越えて上林に入り、その後、北桑田の豪族川勝氏を訪ねるため、宮のわき（美山町宮脇）に至った記録がある。紹巴は大栗峠を越えた可能性がある。
- ・里村紹巴の旅路は、翌年（1570年）に織田信長が越前朝倉氏を攻めた道や、その後天正年間の織田軍の丹後攻めの道と酷似しており、謀報員でもあったと考えられる。
- ・この文献に出てくる上林氏の主（二十歳ばかりなるが風雅に心ざしありて…）は、近江の浅井氏と友好関係にあったため、天正2年（1574年）に信長に対峙した責を負って切腹し、綾部での上林氏の家系は途絶えるが、宇治では、今でも上林氏の血筋の方が「上林春松」として茶匠を営んでおられる。

<文献> 『丹波志何鹿郡部』、金久昌業『北山の峠（下）』ナカニシヤ1980、
北山クラブ『京都北山百山』ナカニシヤ1989、和知町教育委員会『和知の古老談』1987

5 現地調査

(1) 山田道～大栗峠



①

①大栗峠（写真中央）を京都府あやべ青少年山の家付近から撮影。山田道へは、綾部駅からあやバス上林線「寺町」下車、上林山荘方面へ入る。



②

②山田側登り口にある「みぎ やま道 左 わち京道」の道標。下部に「迷椀」（椀の図）の記号がある。



③

③登り口から約 800m。植林地帯であり、2007 年頃に間伐が行われた。古道と交錯する形で作業道が造成され、古道は部分的に作業道に隣接して残存している。



④

④登り口から約 1,000m。斜面が崩落し、古道が細くなっているが、通行は可能である。



⑤

⑤登り口から約 1,400m。古道から下へ急傾斜の豎堀状の溝がある。昔、伐採した木を落とした「木落とし」の溝かもしれない。西方、小畑、三岳山、鬼ヶ城方面の展望あり。雑木の枝を伐採すれば西方の展望がよくなる可能性あり。